

ダリヤ：長詩

著者	芳郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 2
ページ	1 2 8 - 1 2 8
発行年	1916-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6677

乙女

君は稚兒の特權と幸福とに充ちてゐる
君の自由な精神の美しさよ

その垂れたる黒髪は

愛と美の象徴なり

その雪白の腕には

眞紅の血が流れてゐる

その赤き口片は

君の頭を飾るリボンの如く

その細き咽喉から出る歌には

些少の虚偽もない

君は人類のうちで

一番の強者だ

そしてその全身は

眞善美の權化なり

吾は美しき君が手をとりて

漫歩しその折に

吾が心の汚きに戰慄しぬ。

タリヤ

一三甲一

芳

郎

ひとときの偽と知れど
放埒の懐しきまにまに
こよひまた罪の酒のみ
いかならば笑みて眠らむ
じだらくの怪しき吐息の
さめざめとやみにあるとき
その白きまくらべのきぬ
まんだらに涙しむべし
あまぐものつひに雨となり
あへかなる夜は死すとも
わがまごのかたへによりて
ちらんとするダリヤの花。